



会見を終え、司会の羽生企画委員と握手する  
マハティール・マレーシア首相 (10.20)

# 日本記者クラブ会報

第345号  
1998年  
(平成10年)  
11月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル100 0011  
◎社団法人 日本記者クラブ  
☎〇三三三〇二二七二(代)

## 江沢民国家主席をゲストに 実現すれば二度目

一時延期されていた中国の江沢民国家主席の初来日が決まり、国賓のゲストとして日本記者クラブにお迎えできる可能性が高まってきました。実現すれば、六年前の

四月に党総書記としてお迎えして以来、二度目となります。

今年四月に胡錦濤国家副主席、六月に香港のアンソン・チャン政務長官にお出でいただき、この十一月にも、陳健大使の昼食会が予定されるなど、中国要人のゲストが相次ぐ年となりました。激動する国際情勢の中で、日中関係の発展は重要です。大いに期待されます。

先月号で、法人賛助会員の新しい仲間、マイクロソフト社をご紹介しました。今月はさらに三社が加わりました。日本原子力発電▽ブラップジャパン▽エーオーエル(AOL)ジャパンです。

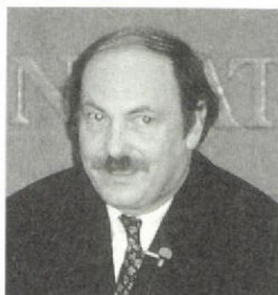
日本原子力発電は、九電力と電源開発が中心になって出資する原子力発電専門会社であり、東海・敦賀の両発電所を擁する日本の原子力発電のパイオニアです。また、ブラップジャパンは、日本を代表する広報会社の一つで、コーポレート・コミュニケーションズ分野のリーダー的存在。エーオーエル・ジャパンは、大手パソコン通信として評価の高いアメリカンオンラインの日本法人です。これまで何度もご説明してきましたが、法人賛助会員は過去十二年間、新たな入会を見合わせてきました。この間、二十数社が退会したことで、これによるクラブ財政への影響は年間千二百万円にものぼっております。このため減少分程度の補充を図れるよう、緩和していただいたわけです。しかし、まだ四社です。九月の新装オープンでレストランなど事

業収益は順調ですが、会員数の減少に伴う会費収入の落ち込みをカバーできる状態ではありません。そこで、十月の会員資格委員会で、さらに入会を呼びかける法人賛助会員の候補リストを作成、書面による理事会で承認をいただきました。候補社は定款に合致する法人の中から約三十社が厳選されており、今後、事務局が折衝に当たることになりますが、厳しい経済状況を考えますと難航するとは避けられません。会員皆様のご特別のご協力をお願いします。なお、今年二月に日本新聞協会から除名処分を受けた奈良新聞社が、このほど開かれた同協会理事会で再入会が認められました。責任者の処分や再出発へ向けての全社的取り組みが評価されていることです。当クラブも同新聞社の再入会を理事会で承認しました。日本記者クラブ賞が例年通り実施されます。今年に残念ながら受賞者が出ませんでした。九九年度は是非とも積極的な候補の推薦をお願いします。

(専務理事 那部 吉正)

## ク ラ ブ ゲ ス ト

## ケント・カルダー 駐日米大使特別補佐官



研究会委員  
10.7 (水) 春名幹男  
司会 長 井 鞠子  
通訳 長 91人  
出席

学者でありながらなかなかの政治家的タレントの持ち主である。そんな隠れた才能を研究会で発揮した。貴賓室で、好きな言葉として「WIN-WIN」と書いてくれた。アメリカ人が好むフレーズだ。負けはなし、勝利するのみ、という意味で、日米関係で言えば、双方が得をする解決策を探る、ということになる。

スピーチでWIN-WINに加え「人の顔をした経済対話」の必要性を繰り返し訴えた。もちろん、彼が述べた米政府の政策は、あの歯に衣着せぬルービン財務長官や、サムズ同副長官の「要求」と全く同じ内容だった。①金融システムの強化②規制緩和③刺激策の再検討④内需拡大の四つの改革策である。だが、カルダー氏が話しはじめる

と、全く響きが違ってくるから不思議だ。アメリカ政府高官がどれほど声高に「日本の責任」を叫んでも日本はなかなか反応しない。日本人自身が世界全体に対する影響力の大きさを認識していないからである。

彼は、各種統計を駆使して、世界における日本経済の規模、アジア太平洋に占めるその重要性から説き起こした。自然な形で、日本の責任の大きさを感ぜさせた。

「経済問題では、人間の顔、心理を考察した正確な論議が必要です」彼はそう述べた。減税をしても、銀行に振り込まれるとなかなか消費増に向かわない実情などをよく認識したうえで分析だ。日本の住宅問題をWIN-WIN施策に取り上げたのもさすがだった。

最近、これほどの説得力のある論議を彼以外あまり聞かない。スピーチが長くなって質問の時間がなくなったのが唯一の欠点だった。共同通信論説副委員長

春名 幹男

## 永野 耐造 科学警察研究所所長



研究会委員  
10.12 (月) 浅井恒雄  
司会 長 93人  
出席

最近、科学警察研究所(科警研)や各県警の科学捜査研究所(科捜研)

の名がしばしば新聞に出るようになった。そこで、科学警察研究所の永野耐造所長をお招きし、科警研の現状、特に薬物中毒について話を聞くことにした。和歌山のカレー中毒事件以来、各地で事件が発生しているだけに関心が高く、参加者も真剣に耳を傾けていた。

研究テーマは犯罪の数ほどあるという科警研。初めはビデオプロジェクトによる研究内容の紹介。法心理学や偽造等の文書、交通事故、火災や爆発、銃器類、遺伝子等の研究、化学薬品や薬毒物の微量分析、写真鑑定や鑑識などが行われ、科学捜査の最新兵器を備えて知能犯に対抗しているという。

科警研には一昨年、法科学第三部と科学第四研究室が新設され、これまでの常識を破る化学技術犯罪を想定した体制が敷かれた。サリン事件などで化学兵器や生物兵器の研究も見直され、最近では青酸カリやヒ素など毒物、薬物中毒事件などが多発する中で、微細とか微量な分析が続けられている。

科警研は事件を直接捜査しているわけではないし、まだ明らかにできないデータもあるのだろう。質問には歯切れの悪い返事もあり、最近の事件に関係ある話は聞かれなかったが、中毒事件の一般論や過去の事件の例から、興味ある科学捜査の全容をつかむことができた。

永野所長はスピーチの前に人の命の大切さを語り、科警研の行動の根本を「静と動」とサインした。犯罪や生と死との対面に先行して、じっくりと静かに思索することが大切だ。その後はぱっと行動しなければならぬ、と学者らしい対応であった。

個人D会員(日経OB)

浅井 恒雄

ク ラ ブ ゲ ス ト

マハティール・モハマド マレーシア首相



後継候補を解任・逮捕したり、通貨取引規制を導入したり、さまざまの意味で時の人だけに、会見には開始前からOBも現役も多数の記者が詰めかけた。その数、二百五十余人、今年度の会見では、もちろん最多記録を争う盛況ぶりだった。そもそも会見はマレーシア側からの強い希望もあったそうで、それは冒頭のあいさつにも反映されていた。

「マレーシアについて悪い報道がまん延している。報道の自由は尊重するが、バイアスをかけて人の意見を聞くのではなく、公平であってほしい。マレーシア経済は良くないが、にもかかわらず事実上、近隣より良

い。われわれは自分の経済を守るために、行動する自由がある。IMF（国際通貨基金）の支援は必要としない。自らを守る力と強力な基盤がある。為替管理は限定的なものだ」等々、ここは自分たちの言い分を伝えねばとの意気込みが存分に伝わってくるものだった。

このあいさつでちよつと興味深かったのは、いまは仇敵となったアンワル前副首相を「閣僚」と述べた後は一貫して「彼」という代名詞で呼び続け、アンワル氏の名前を徹底して無視したことだ。「もう口にしたくないのかな」と、なかなか人間くさい首相の心中が思われた。

質疑応答は「ヘッジファンドは生まれながらの悪者なのか」「裁判開始前に、アンワルに有罪を下そうとする首相こそ不公平では」「独立国と言いつつながら、外国投資会社を国の財政顧問にしたのはなぜか」など厳しい質問も相次いだ。首相も「今日の危機は通貨取引によって起きている」「マスコミこそ（有罪を）

決めつけている」「あくまでアドバイスだ」と反論、ときには巧みにかわすなどさすが手慣れたものだった。

また十一月開催のアジア太平洋経済協力会議（APEC）非公式首脳会議では、議長国としてヘッジファンドの規制問題を中心議題にしたい方針を明らかにした。各社のニュースでは、この部分がもっとも取り上げられたようだ。

さらにAPEC出席問題に関連、アンワル逮捕を懸念する近隣の元首に対しては「発言は自由だが、他国を批判する資格があるか考えてから

コフィ・アナン 国連事務総長

国連事務総長には様々なタイプがある。ガリ前事務総長は、冷戦終結という時代の節目をとらえ、国連の役割を拡大しようとする野心を隠さず、それゆえに不評をかった。ガリ時代に比べ国連の相対的な注目度が低下しているのが影響しているのか、コフィ・アナン氏は前任者とは対照的。物静かな紳士だ。

「気配りのひと」——コロンビア大 学行政・国際関係大学院長から国連事務総長の特別補佐官に転じた、政

にしてほしい。私もシアトルに出席しなかったから（出席を）言えないし、言うつもりもない」とはねつけた。これまで孤軍奮闘の形で攻撃してきたヘッジファンドにも規制の機運が高まるなど、風向きの変化するなか、内憂外患もものは首相の強気が印象づけられた。

産経新聞論説委員

千野 境子

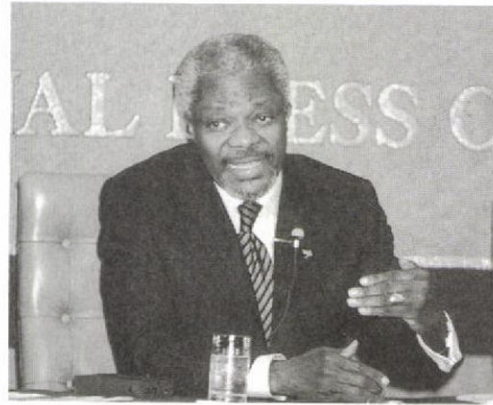
10・20（水）記者会見 司会 羽生健二委員 通訳 池田薫 出席 53人

治学者ジョン・ラギー氏のアナン評である。会見でもエレガントな物腰で「世界が混乱、不安定化している。努力をプールし、グローバルな問題をグローバルに解決したい」と諄々と国連の役割を説いた。

午後三時十五分から四時までと時間が制約されていたせいもあり、濃密な会見だった。質問者は外国プレスふたりを含めて全部で六人。三問は英語による質問だった。残日本に関わる問いは一つだけ。残

ク ラ ブ ゲ ス ト

りは、コソボ、中東、東チモールと広い範囲にわたり、国際刑事裁判所と国家主権との関係といったアカデミックな内容も。国際刑事裁判所は



北島 敬介 検事総長

企画委員に社会部系の人がないので、政治部出身の菱山委員と私で代表質問と司会を手分けすることになった。具体的な事件に関して質疑ができないのは分かっているし、「質問が出なかつたらどうしよう。時間が余ってしまうのでは」との不安を隠しつつの昼食会だった。

検事総長というと厳格で繊細で「こわい人」という先入観があった。

国家主権の減少をもたらすのではなく(国際法執行の)輪の欠けた部分を補う」と答えたあたりは、議論を楽しんでいるようにも見えた。

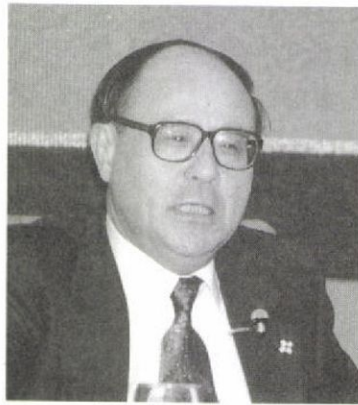
当クラブでの会見は二度目。貴賓室でサインブックにメッセージを求められ「苦手なのですが」と躊躇し、It's great to be back here againと書いた。プレセントのネクタイは一番地味な柄を選んだ。

伊奈 久喜

10・22(木)記者会見 司会 千野  
境子委員 通訳 池田薫 出席  
133人

昼食会の前、やや遅れて控室に到着した本人に恒例の揮毫を依頼すると、「これが一番苦手でして」といながら筆で「温故知新」としたためていた。昭和二十年以降で二十二代目の検事総長だそうだが、戦前から通算すると何代目になるのかは「そういうことにはとんちやくしないもので私知りません」とか。食事の後のスピーチでは、用意さ

れてきたペーパーに沿って検察を取り巻く情勢を逐一説明された。予定の四十分をオーバーしたところで「もう少しいいですか」と断りながら、すべての項目に触れた。このあたりに、さすがというか、やはりというか法の番人としての厳格さを感じさせた。スピーチの中では、携帯電話やFAX、パソコンなどの普及に加えて、先物取引、デリバティブなどコンピュータ経理になって犯罪の痕跡を探すことが極めて困難になっていることなど、指摘されて初めて「なるほど」と思うことも多か



今井 敬 経団連会長

今年五月の就任以来、日本記者クラブ初登場の今井敬経団連会長の昼食会は、テーマは当然経済の話の中

った。

心配した質問も会場から八通のメモがあがってきてほっとした。「企業トップや官僚を逮捕したが、日本の経済の再生のためにはプラスにはならないのではないか」という趣旨の質問が多かったが、間髪を入れず「放置しておけばむしろ国の存立が危うくなる」と簡潔明瞭な回答。出席者が礼儀正しい質問をされていたので、最後に司会の私が失礼をかえりみず「検察ファッショという言葉に対して、どんな考えをお持ちですか」と聞いてみたら、「そう言われても具体的事実について聞かれなければ、何とも答えしようがないですね」とあくまで冷静な法の番人でした。

小林 静雄

10・26(月)昼食会 司会 小林  
静雄委員 菱山郁朗委員 出席  
64人

心ながら、現下の政治状況を色濃く反映したものになった。自由党の小沢一郎党首と会談した足で会場に駆

ク ラ ブ ゲ ス ト



けつけたことも、そういう印象を強めたようだ。

これまでの「財界総理」たる経団連なら、経済界の総意を代表して政府・与党や担当の官庁に注文をつけることで足りた。しかし、目下は民主党主導で金融破たん処理の枠組みが決まったと思つたら、いつのまにか銀行の早期健全化は「自・自・公」路線に一変したように、政策が決まる過程は猫の目状態。

今井会長は「政治が官僚に代わつてリーダーシップを発揮するのは議会制民主主義にはよいこと」と、ブルアス思考で一応、前向き評価を与えている。しかし、国会での金融対策審議が三カ月もかかって、その間に株価の棒下げから景気がさらに悪化したことは「残念な事態」というの

が本音のように思われる。

金融対策が一段落、次は景気対策の番だが、与野党協議を経なければ何も決まらないのなら自分で野党にも積極的に働きかけよう、というのが今井経団連の目下の方針らしく、「与野党によりじん速な政策実施を促したい」と明言した。

会長の話の内容は、三年連続のマイナス成長も覚悟せざるを得ない不況から脱出するための緊急経済対策五項目と、中長期的な構造対策三項目からなっていたが、「証券等健全化機構」「大規模財政出動」「基礎年金の財源を福祉目的税に」「郵便事業への民間参入」など、よくも悪くも経団連カラーにあふれた意欲的な構想が並べられていた。

質問にたつたOBからも「小渕首相の施政方針演説より良かった」と好意的な講評が飛び出すほどだった。

時事通信解説委員長

福沢 亜夫

10・29(木) 昼食会 司会 福沢  
亜夫委員 立岩文夫委員 出席  
138人

■ 会議報告 ■  
第196回会報委員会

(10・12 小会議室)

十月号会報について意見交換したあと、十一月号の編集を協議した。明年一月号の「新春随想」を水上健也元理事長(読売会長)に依頼することにした。

出席 住田委員長。久保、秋山、伊波、桝邑、和田、平野の各委員。

第254回会員資格委員会

(10・13 小会議室)

十一月一日付の入退会を審議し、

AFP新東京支局長 十月からAFPの東京支局長が、ピエール・タリフェールさんからフィリップ・リエスさんに代わった。前支局長はパリに戻り、ヨーロッパ域内向けのニユーサービスの責任者になった。新支局長は八五年から八九年まで、東京で勤務し、今回が二度目。以下は十階のレストランで昼食をとりながらの話から▼東京支局は現在、記者十二人(七人が日本人)で、毎日平均で百本(約一万語)以上の記事をフランス語と英語で配信している。

理事会に答申した。法人賛助会員の入会勧誘候補社リストを作成し、理事会に上程した。

出席 松崎委員長。中村、古川、河西、市村、船田の各委員。

第270回企画委員会

(10・20 宴会場)

年初恒例の「経済見通し」研究会のテーマと講師候補を決定した。

出席 本戸委員長。岸井、重村、橋本、立岩、千野、神志名、迫田、川戸、菱山、和田(主)、浅井の各委員。

英語ニュースの需要が急増し、八割は英語になってきている。フランス人記者も英語で書くことが多い▼アジア各国での一般ニュースの利用のされ方はここ数年、ロイター、APを抜き一位を堅持している。ロイターが金融情報に特化し、APがアメリカ加盟社向けのサービスを基本にしているのも一因だが、良質な企画モノで差をつけてきていると思うので、ストレート・ニュース量産に追いまくられる中だが、同僚に「一日企画一本」とハッパをかけている。(石川)

## 沖縄国会

# 「召集日」を追え



木下 隆

「何度同じことばっかり聞くんだ。分かんことは分かんのだ。」

保利茂・内閣官房長官はテーブルをドンとたたくと不機嫌そうな顔をして立ち上がり、部屋を出ていった。一九七〇年の十一月下旬、国会内の官房長官室での記者懇談での出来事だった。

当時の最大の問題は沖縄。沖縄の復帰なくして戦後は終わらないと名文句を吐いた佐藤栄作首相は、沖縄返還に政治生命を賭けて取り組んでいた。一九六九年十一月の佐藤・ニクソン会談で「七十二年核抜き本土並み」という返還の

基本方針で合意、共同声明にうたわれた。しかし、返還協定はいつ調印されるのか。当時右側通行など、全くアメリカ式だった沖縄を本土並みとする沖縄関連法案を審議し、返還協定の批准承認を求めた。これが一九七〇年から七二年に至る佐藤内閣末期の政局の流れを読むキーポイントだった。

したがって、当時の首相官邸記者は、沖縄国会の召集時期の取材に明け暮れていた。一日三回の官房長官会見、夜の懇談でも、手を変え品を変えて沖縄国会召集のタイミングをつかもうとする。普通

が予想以上に堅く、のらりくらりと逃げ回る。

保利さんなど、朝から晩まで沖縄国会召集の時期ばかり質問される。冒頭に書いた「分かんことは分かん」発言は、こうした保利さんの苛立ちの爆発だったとも言えよう。

しかし、私はその時、おかしいな、と思った。保利茂と言え、私がこれまで取材対象とした政治家の方々の中でも、大政治家と言える一人だ。実に懐の深い、人間味豊かな人だった。その保利さんが、あんなに簡単に怒るはずがない。何かある。

だと臨時国会は通常国会閉幕後の六月ごろか、夏休み後、九月ごろからの秋の陣と相場が決まっている。だから比較的簡単につかめると思ったが、それが分からない。内閣側の口

この感触について、その夜、我が社の官邸クラブの一同で検討し、分析した。結論は、あれは保利さんが怒ってみせたのではないかと、ということだった。国会召集決定について非常に難しい問題点がある。それを正面攻撃で「いつか、いつか」と聞かれても答えられないよ、と言いたかったのではないかとこの解釈だ。

### 天皇が外遊する？

翌日から、われわれは戦術を変え、国会召集に支障となることを考えられる限り列挙して、これらの仮説を取材源にぶっつけ反応を見ながら消去していった。

今から考えると笑い話だが、国会議事堂の改修から佐藤首相の健康問題（ガン？）など真剣になつて取材して回った。

いずれも無反応。全面否定。全く行き詰まってしまった。しかし、人間、追い詰められ、必死で考え続けていると何かひらめくものがある日、夜回りから疲れ果て

て帰り、フトンに身を横たえた時、ハツと思った。これは天皇に關係することではないか。天皇の国事行為の第二は「国会を召集すること」だ。何かこの時期に、天皇の国会召集に支障があるような事態があるのか。健康は良いようだ。天皇がいない。国外か。天海外遊。これは当たってみる価値がある。

夜が明けるのを待って官邸に駆け付け、全員にこの考えを話し、この線で取材を展開する態勢を固めた。

この取材に対する反応はすこかった。もちろん全面否定。しかし、その否定の仕方。驚き。困惑。「読さん、この問題には触れない方がいいですよ」に至っては、われわれの確信を強固にしてくれた。

これからの取材も容易ではなかった。いつ、どこへ行くのか。日頃、お付き合い願っている首相官邸の高官の方々が、こんなに口が堅いとは思ひもしなかった。しかし、どこか、われわれの努力を評価するような口ぶりもある。

こんな膠着状態に苦しんでいたある日、忘れもしない七一年二月二十日の早朝、官邸のメンバーの一人からの電話にたつき起こされた。「朝日にやられました」

「両陛下欧州ご訪問」「今秋二週間の計画」、三段の紙面幅いっぱい大きな箱組みが一面の最上段を飾っている。この時ほど、足もとが崩れるような感じを実感したことはない。

天皇初の外遊というスクープ。考えに考えて、二カ月余に及ぶ裏付け取材を重ねて、ようやく何かをつかめそうになった時に……。官邸に関する限り、完全に他社をリードしていると思っていたのに……。

### 逃がしたスクープに負けず

その夜は、新宿で一同やけ酒をあおった。なぜやられたか。反省とも泣き言とも言えぬ激論の中で、誰かが言い出した。「まだやれるじゃないか。朝日はご訪欧は抜いたが、訪問国や時期を確定していない。まだ追い付ける」。

一斉に店を飛び出し電話ボックスへ。取材対象は「いや、君たちはよくやった。抜かれるなら君たちに抜かれたかったよ」と慰めてくれたうえ、ご訪欧計画の概要を話してくれた。最終版締め切りギリギリで社に上がり、やけ酒でベロベロになりながらエンピツを握った。

翌日、読み直してみても論旨は明解、公式訪問国、非公式訪問国、時期、閣議決定の日まで書き込まれ、われわれのスタートだった沖繩国会の日程も、外相が天皇に同行するため召集をずらすことまで書いている。あの泥酔状態の中では完璧な原稿だったと今でも思っている。

なぜ朝日に抜かれたのか。後で聞いたところでは、朝日は、ボンの特派員がドイツの雑誌の社交欄で、当時のリュプケ大統領夫人が「秋にはヒロヒトが来るのね」と語ったという記事でピンと来て、本社に打ち返したのが、この原稿となったとのことだ。われわれは

沖繩問題にとらわれ過ぎ、うっかり宮内庁クラブで騒がれてはと、社会部との共同体制をとらなかつたことに大きな敗因があった。

もう一つ。単に勘による推論だけでなく、法律的手続き論にも精通してはならないということだ。数年前にできたばかりの「国事行為の臨時代行に関する法律」の運用について、十分な知識がなかった。

とくに外国との交渉、同時発表などがからむと、半年以上前に閣議決定しなくてはならない。秋にご外遊とすれば、二月末には閣議決定してはなくてはならない。こうした法手続きの詰めをやっていたら、もう少し攻め方も鋭くなっていたのではなかつたかと反省した次第だ。

きのした たかし会員 一九三〇年生まれ  
五六年読売新聞入社 政治部首相官邸主任 世論調査室長 政治部長 編集局長などを務め 八七年福島民友新聞専務取締役編集局長に 九一年から代表取締役社長

## ワーキング

## プレス

口下手な自分のことを指して「ボキヤ貧」。ボキヤブラリーが貧困という意味で、小渕恵三首相が首相番記者にほやいた造語だが、口に出してみると、なかなか味わいい深い響きがある。メディアでもしきりに取り上げられたし、今年の流行語大賞でも有力候補となるかもしれない。

国会答弁や番記者からの質問に窮する姿が目立ち、首相の表現力に欠陥があるように言われているが、こんな言葉をさらりと語るくらいだから、必ずしも「ボキヤ貧」とは言えない。

例えば米国・大リーグのソーサ、マグワイア両選手の本塁打競争についての質問。ルースやマリス、マントルと名選手の名を次々と挙げて「国民に与えた興奮、感動は米国社会にいろいろな意味で好影響を与え……」とひとしきりの解説。「国民栄誉賞をあげたいけど、日本人じゃないからだめだな」とも付け加え、大変なリップサーピスぶりだった。

橋本龍太郎前首相なら「何でそんなこと聞くんだ」とムツとされ

## —小渕番3カ月—

## 人柄あつての丸投げ、丸のみ

▶ 浅田 晃 弘  
(東京新聞)

ただらう話題にも答えてくれるのはありがたい。伝え聞いていた首相の人柄の良さをあらためて感じる瞬間だが、冗舌なのは、政策に關係のない話やぼやき。重要な政治課題となると一転して、言葉が少なくなるのには頭が痛い。

金融再生関連法案の審議が難航していた先日の臨時国会では、「報告を受けてない」「聞いてない」の連発。首相の意向が全く分からない一方、野中広務官房長官の言葉が日に日に重みを増し、首相番

としては、やりきれない思いにとられることもあった。

本人は、昭和恐慌の引き金となった片岡温直蔵相の失言を例に「なるべく言葉を少なくし、国民の不安を起こさないようにしている」というが、国民の目から見れば、説明不足は自信のなさとして映らない。

各種世論調査の内閣支持率は、発足当初の三〇%から二〇%台へと、景気と同様に、低落の一途。原因は、不支持の理由になつてきた「指導力不足」のイメージが、この三カ月でますます浮き彫りになつてきたことと思われる。

参院選で自民党が惨敗した後の臨時国会で、金融再生関連、金融機能早期健全化の二法案を成立させ、不良債権問題の解決に一步を踏み出した。それが首相の得点とならないところに、首相の不思議なキャラクターが象徴されている。

宮沢喜一蔵相、堺屋太一経企庁長官、与謝野馨通産相ら政策通の閣僚に経済政策を任せ、自らは「総合プロデューサー」として、その手腕を見守る。金融再生関連法案

をめぐる協議では、政府提出法案を引込め、野党案を原案に与野党が修正を行うという異例の事態となった。

「二人の力ですべてを解決できるスーパーマンはいない」野党各党と誠心誠意話し合い、理解を得られるように努力したい」などの発言からは、我を通すことを好まず、謙虚な性格の持ち主であることがうかがえる。強いリーダーシップを求める世論とは相容れなくとも、この「人柄」あつての「丸投げ」と「丸のみ」。小渕流の政治手法は、この三カ月ではっきりとしてきた。

「激しい批判に耐えかねている。鈍牛とて血は流れている」。自虐的なジョークで笑いを取る首相を見ていると、「この人で大丈夫か」と心配になる半面、とほけたふりをして、案外難しいことをすいすいとこなしていつてしまうのではないかと、相反する思いが頭の中を錯綜する。

あさだ・あきひろ 一九九一年入社 九八年八月から政治部で首相官邸を担当



ドイツの新首相ゲアハルト・シユレーダー氏(五四)は、「メディア・マイスター」と呼ばれる。報道機関との付き合い方は一流というわけだ。

90年連合・緑の党との連立協定を承認した十月二十五日の社会民主党(SPD)大会。シユレーダー氏はボンのホテルのホールで演説したあと、ドリス夫人(三五)を伴って前ぶれなく記者ラウンジに姿を見せた。

白ワインを立ち飲みしながら談笑。一日後の首相指名について「現実だから緊張しないでしょ」と問われると、「いや、緊張するよ。人生いつもストレスさ」と笑い、夫人を引き寄せてチュッ。一メートルの至近距離で見せられる方はヤレヤレという感じだが、夫妻で記者とのやりとりを楽しむ風情だ。

四人目の妻ドリスさんは元雑誌記者。テレビの元ワシントン特派員との間にできた娘を連れ、州首相だったシユレーダー氏をゲット。入籍から一年たった。同氏の語り口が説得力を感じさせる落ち着いたスタイルに変わったのは、

夫人のおかげという。

若手や外国人の記者にもていねいに答える。手ごわい質問で切り込む相手の名前はすぐ覚え、たとえば老練な英ファイナンシャル・タイムズのノーマン記者には、「ヘル・ノーマン、以前のインタビューでもお答えしましたが…」と記者会見でも気をつかう。

十六年間政権を担当したヘルムート・コール前首相(六八)は、ぶつきらぼうだった。歴史観を披露して、味わい深いオフレコ懇談も

—ドイツ—

新首相は  
メディア・マイスター

▶ 桜井 元  
(朝日新聞社)

ワーキング  
プレス

あったが、一般に気に入った新聞・テレビのインタビューしか受けず、少数の報道幹部を大切にしたい。こうした一部ベテランを別に

て、メディアはおおむね新政権歓迎の空気が。シユレーダー氏と緑の党から外相に就いたヨシユカ・フィッシャー氏(五〇)が連立協定調印を発表した記者会見は、当意即妙の答えに笑いのはじけ、舞台がぐるりと回った印象を受けた。

ただ、日独の政治報道の違いを痛感することも。足かけ二十日近くかかった連立交渉で、両党がどう主張をぶつけ、緑の党が何を条件に譲歩したのか、という生々しい応酬は報じられない。社民党首のオスカール・ラフォンテーヌ蔵相(五五)が、左派の立場を「新中道」の新首相にどう押しつけたか、という説得術も分からない。

永田町なら、会議室のとびらに耳を押しつけるか、親しい議員にメモを頼み込んで、断片でもつかみたい内容だ。なのに、ボンの記者は「個別の交渉内容は秘密」(シユレーダー氏)と突っぱねられると引き下がる。記者会見で語られ

る言葉は雄弁だが、中身は乏しい。これを加工し、解説風に仕立てるのが大半の記事だ。真相を探ろうと検証に動くのは、政治家とのつながりが深いとされる週刊誌シユピーゲルなど一部に限られる。

政権交代の大波が静まると、来年は首都ベルリンへの議会、主要官庁の移転という波がやってくる。ベルリンに先行した報道各社も少なくないが、ボン残留組はこれから腰を上げる。現場をベルリンに移し、ドイツの政治報道は何かが変わり始めるのだろうか。

さくらいはじめ 一九八一年入社 政治部長  
名古屋社会部次長などを経て 九七年十一月からボン支局長



指名直後、満面の笑みでプレスにこたえるシユレーダー夫妻=AP/WWP (10.27)

後ろから突然、バシッと肩をたたかれた。「ジャマだ」。振り返る間もなく、笑みを浮かべた権藤さんが、記者のわきをさっさとすり抜けて、ロッカールームへと姿を消した。

十月二十六日。横浜ベイスターズの三十八年ぶりの日本一が目前に迫った試合前。王手をかけて地元へ帰ってきていた。「さすがに機嫌がいいね」。担当記者同士、ひそひそと話したものだ。強気な権藤さんも、第3戦からの連敗にピリピリした雰囲気があった。声小さくなる、足早になる。しかし第5戦の快勝で、なけば日本一を確信していたのだろう。

神奈川新聞のベイスターズ取材は、横浜スタジアムのほか、東京ドームと神宮球場の試合は現場に行き、遠征は共同通信任せ、が基本だった。しかし、首位をひた走る姿に放っておけなくなり、オールスター明けの七月末から遠征にも帯同するようになった。行く先々で、大阪でも、名古屋でも、広島でも、スポーツ紙の一面を賑わせている。これは横浜だけの騒

## ワーキング

## プレス

### —ベイズターズ優勝—

# 38年前の紙面を めくりながら

▶ 島山卓也  
(神奈川新聞社)

ぎじやない。横浜を離れて、初めて気づかされた。

八月ごろだったか、「早く楽になりたい」という声を耳にするようになった。あのクールな進藤達哉選手でさえ、そんなことをぶつつかさ言う。七月から四カ月間、六十試合余りをぶつ通しでつき合った当方も、気持ちは同じ。「横浜に優勝してほしい？」と、担当記者で気持ちは何度も確かめあった。結論はいつも同じ。「してもしなくていい。早く終わってくれ」。いい

試合をたくさん見せてくれた選手たちに感謝するのは当然だが、この長丁場を乗り切るだけの基礎体力を与えてくれた両親にまず、感謝しなくちゃいけない。新聞記者だって体が資本だ。

騒ぎが大きくなる中で、三十八年前のことを改めて勉強しなければいけなくなった。一九七一年生まれの記者に、それより十一年前の優勝なんて実感しようもない。

「三原マジック」という言葉は知っていても、中身はよく知らない。近藤昭仁。監督としてのイメージが強すぎる。秋山登、土井淳……。うーん。聞いたことがあるけどなあ。大石正彦、渡辺清……。すいません、知りません。

かび臭く、茶色く濁り、ちょっとしたでもものすると、粉になりそうな、昔々の紙面をめくりながら、たった一度の優勝とその後をたどる。「黒木の二千万円落球」ってなんだ。「落球」だけれど、記録上は失策がついてないらしい。「二千万」じゃなくて「五千万」

じゃないか……。同世代の多い担当記者同士、現場で情報を交換し



胸上げ回数10回も日本一の新記録  
(10.26)

あって、心を強くした。

横浜市中区にある球団事務所。プレスルームには「大洋日本一の夢実現」「堂々大毎に四連勝」と謳った、一九六〇年十月十六日付本紙一面が写真に起こされてパネル掲示されている。「いつまでたってもこの写真。次はいつなんだろう」。ずっと思い続けた「次」がやってくる。やがて「横浜、38年ぶり日本一」「地元で歓喜の胸上げ」の見出しと、権藤さんが両こぶしを握りしめて宙に舞う写真が飾られることだろう。

はたけやま・たくや 一九九四年入社 九六年から運動部で横浜ベイスターズ番

「予感が…。Go'n Do!」四月、プロ野球ペナントレースの開幕に合わせ、横浜市内の駅の電飾ボードなどに掲出した番組宣伝のキャッチコピーである。TVKは今シーズンも、横浜ベイスターズの公式戦五十七試合の中継を編成した。その「予感」が、暑くなるにつれて「実感」に変わってきた。

そして十月、番組改編期だが、今年はずっと。ベイスターズ、首位の座を堅持。雨天順延が多かったこともあって、追加日程で十二日間に、眼下の敵「中日」との六試合を含む最終十二試合が組まれた。そのすべてが注視的。うち放送可能な十試合については、優勝決定ゲームまで完全中継（試合終了まで）し、優勝決定直後には選手記者会見の様相や市民のフィナーレを伝える特別番組も放送することにした。「市民、視聴者と喜びを分かち合う番組を」

この時点で、「ベイスターズの優勝」はスポーツの枠を超えて、少なくとも県内では社会的事件の様相を呈していた。放送権のない名古屋での二試合の日は、「なぜ放送し

ないんだ」の電話が局に殺到した。Xデーに備えて、連日のスタッフ・ミーティング。中継車と要員の確保と配置、伝送手段は？ 特番の構成、ゲストの押さえ、キー局の放送動向の把握…。ベイスターズの一試合一試合の勝敗で状況はくるくると変わる。

**列島報告**

— 神奈川 —

**スポーツの  
当たり年**

赤羽宏之  
(テレビ神奈川局長  
編成局)

園で権藤監督の歓喜の胴上げ。特番は深夜まで四時間に及んだ。日本シリーズでは、勢いに乗って西武ライオンズを4-2で下した。シリーズの中継こそ実現できなかったが、「かながわ・ゆめ国体」秋季大会とスタッフを二分して、ここでも二つのシリーズ特番を放送した。

なにしろ、ベイスターズの優勝は三十八年ぶり。TVKは開局二十七年目。優勝経験者は社内一人もいない。そんな思いが逆に社員の気持ちを高めたのか、打ち合わせのたびに参加人数が増え、いつしか総動員態勢となった。

後はご承知の通り。八日に甲子園で権藤監督の歓喜の胴上げ。特番は深夜まで四時間に及んだ。日本シリーズでは、勢いに乗って西武ライオンズを4-2で下した。シリーズの中継こそ実現できなかったが、「かながわ・ゆめ国体」秋季大会とスタッフを二分して、ここでも二つのシリーズ特番を放送した。

今年、横浜にとつて「スポーツの当たり年」となった。正月早々、箱根駅伝で神奈川大学がぶつちぎりの二連覇。続いてラグビー大学選手権では、関東学院が決勝戦で強豪明治を破って初優勝。さらに高校野球では、横浜高校が史上五度目の春夏連覇を達成した。

ついでに言えば、お隣の横須賀市の日産自動車も夏の都市対抗野球で十四年ぶりに優勝している。大学ラグビーは、TVKが開局五年目から毎シーズン数十試合の中継を続けてきており、看板とす

る番組の一つ。日ごろ協力関係にある地元校の初優勝は、局にとつてもうれいものだった。松坂投手を擁する横浜高校は、県大会、全国大会を通じてさわやかで、ドラマチックなプレーを展開、ファンの感動を呼んだ。こうした「大当たり」にスタッフは文字通り東奔西走、その都度ローカル局ならではの番組を制作し、視聴者の要求にこたえてきた。深刻な不況から、わが社にとって営業的には必ずしも追い風にならなかったのは残念だが、息苦しい世情に清新なハマ風が吹いたのが救いである。(あかはね・ひろし)



「ゴー・(ア)ン・ドウ」(権藤)の宣伝コピーは もちろんベイスターズへのエール

## ことばの散歩

①

関税貿易一

般協定(ガット)新多角的貿易交渉(ウルグアイ・ラウンド)——これだけで三十三文字。新聞は一行が十二字

だから、優に二行を超えてしまう。

しかし、このフルネームを外すわけにはいかない。最近アルファベットやカタカナの略語が多すぎる」という苦情が、特に年配の読者から寄せられているからだ。そのため、最初に出てきた部分だけ、冒頭に書いたように正式名称を掲載し、二度目からは「ガット」などの略語を使う。

そのガットは一九九五年、世界貿易機関に変わった。英語でWorld Trade Organization。頭文字をとってWTOという略語になったが、やっぱりなことに世界観光機関(World Tourism Organization)もこの

略語

う別組織だって「WTO」なのだ。

この手の「ダブルブッキング略語」が、実は結構多い。CD(譲渡性預金、コンバクトディスク、現金自動支払機など)、ADB(アフリカ開発銀行、アジア開発銀行)という例も有名だ。

最近気になるのがG7。先進7カ国をさしてG7というが、先進7カ国蔵相・中央銀行総裁会議も略して「G7」。「先進7カ国(G7)の経済閣僚が参加してワシントンで開かれる先進7カ国蔵相・中央銀行総裁会議(G7)の場で、その問題が焦点となるが、G7は……」なんて原稿には「どっちのG7?」と悩まされる。

便利なアルファベット略語だが、取り扱いは要注意である。

毎日新聞編集制作センター

校閲グループ 原田幸治郎

略語やカタカナ表記のはんらん。逆に、「死語」となってしまった言葉——新聞用語や放送言葉も時代とともに変化しています。各社の校閲・用語関係者の、ことばをめぐってのエッセーを連載します。

### ■秋のゴルフ会

森本会員(朝日OB)が優勝

第72回ゴルフ会が十月二十九日(木)、厚木国際カントリー倶楽部で開催されました。九十一歳の広岡知男会員はじめ十四人(うち初参加二人)が、丹沢連峰を背景に気迫あふれるプレーを展開しました。

結果は、「ドライバーのスイング改造が勝因」という森本英之会員がNET72で優勝、一打差で吉岡秀夫会員(テレビ朝日OB)が二位、永野信利会員(中日OB)がNET78で三位でした。

ゴルフコンペは春と秋に開催しています。ゴルフ好きの会員はぜひ、事務局の小橋までご連絡ください。

### 招待券

朝日新聞社から「ラウズ・ボディ ヌード写真の近現代」(99・1・17)、大丸ミュージアムから「北大路魯山人展」(11・10終了)の招待券をそれぞれご惠贈いただきました。お礼申し上げます。

### 寄贈書

ガバナンスの課題

日本国際交流センター

### ●囲碁の会(十月二十四日)

大窪九段が指導対局

あいにくの空模様にもかかわらず、二十二人が集まった十月の例会。八カ月ぶりにプロ棋士(大窪一玄九段)による指導対局が行われました。会場一番乗りの新井明会長が六子で二局、相川誠一、竹尾新吾(ともに六子)、出田裕(四子)、村上重美(五子)の各氏が胸を借りた中で、出田会員がひとり白星を獲得しました。

四十五局戦われた公式対局では、石川基、佐伯晋の両氏が三連勝したほか、田川五郎、田中信義、西山武典の各氏も優秀賞を獲得しました。次回の例会は十一月二十一日(土)午後一時から宴会場で行います。

会員の著書(ご惠贈いただきました)  
経済学通になる本  
(オーエス出版 一、三〇〇円)

「いのち」の開拓者  
(共同通信社 一、七〇〇円)  
今 静行

永田治乱興亡の十二年 上、下  
(常陽新聞社 各三、五〇〇円)  
四方 洋

今井 久夫

◇個人D会員（五十音順）

# プロフィール

十月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

それぞれ個性的な三姉妹の感じがよく出ていた。といっても、私自身は北京勤務中に宋慶齡（孫文夫人）が死去したので少しコメントを書き、上海での納骨式を見たぐらいの縁しかない。写真や残された逸話からの印象と一致する、という程度のことだ。

映画のキャブ

シヨンに「一人は金、一人は権力、一人は国を愛した」と出た。靄齡、美齡、慶齡の順だが、ステロタイプの話にならないかと心配した。しかしそれは杞憂で、中国の嵐の時代を強く生き抜いた三姉妹を、共感をこめて描いていた。さすがは香港期待の女性監督、



宋家の三姉妹

か」と聞いてきた人がいる。一世紀近い現代史のドラマを二時間で見せようというのだから、単純化や脚色も多い。若き日の三姉妹は実際には一緒に渡米してお

く、美齡の夫、蒋介石はどうか。だがこの方も、まずまずだった。慶齡の口を借りて彼の左派弾圧などを批判する一方、ともかくも中国統一を果たした蒋介石の剛直な姿もきちんと描いていた。これなら台湾上映も大丈夫だろう。

試写会の帰途、「史実はあの通り

ら、西安事件前に学生が抗日を迫って焼身自殺する場面なども記録がない。映画見物は歴史の勉強の入り口と考え、三姉妹関連のことを調べたい向きには、田畑光永

メイベル・チャン。

試写会

それより気になるのが、姉妹を取り巻く男たちの評価だ。どこでも受けのいい孫文はともか

会員訳の『宋王朝』（S・シーグレイプ著、サイマル出版会）が便利だ。

朝日新聞OB 田所 竹彦

# 写真部

写真 井上 昭義

(一九八三年日本経済新聞入社 西部支社編集部  
などを経て 九七年から東京本社編集部写真部)



福島県須賀川市(9・13)

## 泣きっ面にハチ

ことしは梅雨明け宣言もないまま雨が降り続き、カラッと晴れた日はほとんどなかった。秋になってかえって台風又来襲がふえ、収穫期を迎えた田んぼと野菜畑、果樹園は大きな被害を受けた。写真は八月末の大雨で、道路のアスファルトがはがれて水田の中に入り、収穫間近の稲が穂を实らせたまま枯れてしまった惨状である。農民の皆さんは大変だなあと同情した次第である。

だが、この余波が都会人にも襲いかかってきた。ある朝、パンと一緒に食べるためレタスの一枚目の葉を取って捨てようとしたら、妻が「レタスは倍に値上がりして高くなったのよ。一枚目も棄てずに食べてください」という。それで青い葉を食べたが、少し青っぽい味だった。そうか、長雨の被害は都会人も及んできたのかと実感した。

長引く平成デフレに国民全部があきあきしているが、ただ一つ、よいことは消費者物価が安定していることだった。だのに農産物価格が上がるのでは、まさしく泣きっ面にハチである。

お米の方は、新潟コシヒカリなど銘柄米が値上がりしているが、政府は過去四年の連続豊作でたっぷり古米在庫をかかえている。何がなんでも新米をと言わなければ、米不足騒動にはならないという。

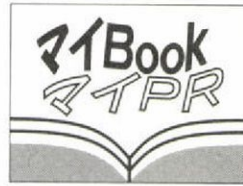
(大谷 健)

『アジア太平洋情報論』

橋本 秀一 (NHK放送文化研究所主任研究員)

インターネットや通信衛星など情報伝達手段の進歩によって、国境はなくなつたともいわれます。しかしアジアでは、依然として情報統制国家が少なくありません。

本書は、アジア太平洋地域における政治の民主化とメディアの関係や、メディアの位置づけを、できるだけ実例をあげて比較してみました。アジア事情に疎い若い人たち向けに書いた本ですが、専門家の皆様にも読んでいただけたら幸いです。(酒井書店 一、九〇〇円)



『風は揚がらずー迷走する政治改革』

富森 觀児 (朝日新聞OB)

ものごとの変転があまりにも目まぐるしい昨今だけに、人々は最近の出来事もつい忘れがちである。平成の政治改革についても、今では永田町も、マスコミもほとんど話題にしない。

あれだけの大騒ぎをしたあげく、今日の政治の衰退をもたらした平成の政治改革とは何だったのか。その総括に挑戦したのが本書である。いろんな角度からの分析と五五年体制を生むときの同じような政治混迷との比較など、読みやすいように工夫したつもりだ。

(朝日新聞社 一、〇〇〇円)

『中坊公平の追いつめる 弱虫指揮官の大いなる魂』

高尾 義彦 (毎日新聞編集局長)

日弁連会長だった中坊さんとの出会いが縁で、この本が生まれた。会長としての活動を報告した拙著『強きをくじき 司法改革への道』(毎日新聞社刊)を下敷きに、主に旧住専の債権回収と香川県豊島の産業廃棄物撤去運動に焦点を当てた。中坊さんの意向もあり、住民運動の主要役や「副官」たちを通じて、中坊さんの人間像を追った。同時に戦後の国民主権を問い直し現場主義に徹する姿勢に共感したことが執筆の強い動機で、自分なりの思いも込めたつもりである。

(毎日新聞社 一、五〇〇円)

99年度「日本記者クラブ賞」

候補者の推薦を

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を、明年一月三十日(土)までに候補としてご推薦ください。会員およびプレス会員社に属する方が候補有資格者です。

「選考基準」は左記の通りです。

- ① 現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である。(現役という意味は現に活動しているということ) ことで故人は対象としない)
- ② 活動が長期にわたるといふ意味での「敬老賞」でもなく、日の当たらない困難なところで活動

しているという意味での「風雪賞」でもない。

- ③ スクーブ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。

- ④ その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

推薦者は所定の用紙に記入し、推薦理由、参考資料を添えて提出願います。詳細につきましては、事務局へお問い合わせください。

計報 小林計明会員 (日本農業新聞常務理事・62歳)

が十月十二日急性肺炎のため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

会報委員会

委員長 住田良能

委員 久保伸太郎 秋山民雄 伊波新之助

梶邑義道 和田千年 平野恭子

連絡 長谷川和子 本庄五月

(電話) 〇三―三五〇三―二七二二

(FAX) 〇三―三五〇三―二七二二